

企画展「シン・サクラジマ～鮮やかに蘇る大正大噴火の記録～」

県立博物館

大正大噴火の写真がカラーに！

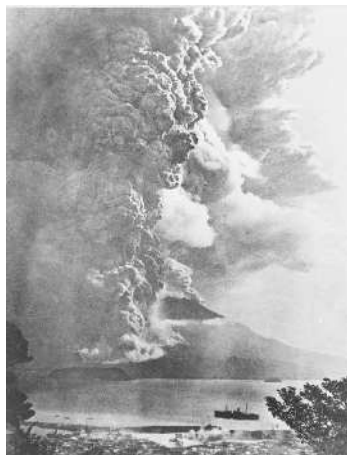
令和6年3月23日（土）から6月2日（日）まで、県立博物館の本館1階企画展示室で、企画展「シン・サクラジマ～鮮やかに蘇る大正大噴火の記録～」を開催します。



桜島は大正3（1914）年1月12日に、明治以降の日本で最大規模とされる爆発的噴火を起こし、同日発生した地震と合わせて58名の犠牲者を出しました。今年はその大噴火から110年の節目の年に当たります。当館は、桜島大正大噴火の資料を保管するために設置された、県立図書館郷土博物室がはじまりです。現在も本館2

階には桜島の過去の噴火で流れ出した溶岩の範囲がわかるジオラマや、大正大噴火で噴出した巨大な軽石（スレッドレーススコリア：県の天然記念物）が展示してあります。また、当時撮影された写真も271点保管されています。

近年の情報技術の発展により、AIを使ってモノクロ写真をカラー化する技術が注目されています。そこで今回、鹿児島大学の井村隆介准教授と協力して、当館が所蔵する大正大噴火に関するモノクロ写真をカラー化しました。来館者の皆様、大正大噴火規模の火山災害を、よりリアリティーを持って想像し、これからの火山防災について考えていただく機会にしたいと考えています。



【大正大噴火を写した写真】

噴火を後世に伝えようとした人々

今回の企画展では、カラー化した写真の他に、東京大学地震研究所図書室が所蔵する大正大噴火直後の鹿児島を撮影した活動写真（動画）や、黒田清輝・山下兼秀といった本県出身の画家による大正大噴火を描いた絵画、県内各地に残る大正大噴火を伝える自然災害伝承碑なども紹介します。

山下兼秀は、1882年に鹿児島市に生まれ、東京美術学校西洋画科に入学して絵画を学びました。



【山下兼秀「夜の桜島」】

帰郷後は百貨店に勤務して広告デザイナーとして活躍しながら後進の育成にも取り組みました。大正大噴火の際には、たまたま帰省していた黒田清輝に随行して、多くの作品を残しました。山下兼秀が描いた「夜の桜島」と「降灰の惨状」という2作品は、当館が所蔵しています。

当館隣の照国公園の一角には、桜島爆発記念碑と記された石碑が建っています。背面には、桜島大正大噴火の経過と、碑を建立するに至った想いが細かく刻まれています。この碑文を創案したのは、鹿児島出身の地震学者である今村明恒博士です。郷土で起こった未曾有の火山災害に接し、百年後に再び同じような災害が起こったとしても、大正大噴火を教訓に、少しでも被害が軽減されるようにと結んでいます。



【桜島爆発記念碑】

大正大噴火から110年が経ち、マグマだまりにはすでに当時とほぼ同じ量のマグマが蓄積されているという研究結果もあります。いずれ起こると考えられる火山災害に備えるためにも、先人たちが残した数多くの記録に触れて、いま一度活火山としての桜島を見直してみましょう。

【掲載ホームページ】

ホーム > 教育・文化・交流 > 文化・芸術 > 鹿児島県立博物館 > イベント > 企画展

